5-3　野洲川について（令和元年10月23日）

野洲市歴史民俗博物館の齊藤先生に野洲川下流域の天井川において、
人々が歴史的にどのように生活をしていたかお話を伺った。

<野洲川について>

・上流部は急峻で林相も貧弱、保水機能も低い。山地・丘陵部は風化の進んだ花崗岩・第三紀堆積岩により構成されている。大量の土砂が流出。日本最大の三角州を形成している。

・服部遺跡をはじめとした弥生時代の遺跡が発見。古くから集落が形成。耕地開発が展開されていた。

・野洲市西河原においては白凰・奈良時代の木簡が発見。奈良時代には条理地割が施されていた。

・文献記録では、野洲川下流域では約10年に1回の割合で水害が発生。築堤が繰り返され、天井川が形成。

<野洲川北流の堤防　天井川の形成化>

・15世紀において、築堤と堤防の決壊を確認できる。堤防があるから、河床に砂がたまり、天井川化する原因となることから、このころから天井川の形成が始まった可能性がある。

<水害の発生を前提とした野洲川下流域の生活>

・堤外地（中州）において、耕地があった。水害の発生を前提としていたが、飼料場として活用されていた。・野洲川下流域においては、御神神社と兵主神社がそれぞれ簗場を有し、簗漁を展開していた。

・野洲川は頻繁に氾濫したため、自然環境に応じた簗漁が展開されていたことが想定される。

<伏流水による文化の創出>

・野洲市の六条等では、野洲川の水をひく用水路（樋）があり、集落まで水を引いていた。

・天井川は河床が高いから水がひきやすかった。

・白い布が雪のように一面に干されており、美しい風景を作り出していた。

・野洲郡には79軒もの多くの酒造屋が存在していた。

・蛍が多くいた。また、庭園に地下水が自噴していた。

・天井川となったことで、伏流水が湧き出し、野洲晒や酒造などの産業を支える基盤となった。

また、蛍や美しい景観、文化も創出したと考えられる。

湖南流域環境保全協議会.indd　19　　2022/04/22　12:08

<洪水時における対応>

・明治29年（1896）９月に発生した琵琶湖洪水（記録上最大の琵琶湖洪水）

　→天井川化しているため、川が宅地よりも高い。そのため、野洲川が氾濫した際には、堤防が避難場所となっていた。自宅周辺に田船を保有していたため、避難が可能であった。

・昭和28年（1953）の野洲川大洪水

　→野洲川北流右岸堤防が195メートルにわたって決壊し、甚大な被害が出た。

これを機に野洲川を一本化する改修の動きが始まった。

・洪水時の行動：家畜である牛を避難させる、漬物を持って2階へあがる（保存食と長期化の予想）、田船による避難と給水活動、15歳以上の男子は防水活動

→行政のみに頼らない地域的な対応をしていた。

頻繁に発生するため、洪水の際の行動が住民にも染みついていた。

マニュアル的対応が習性化。また、代々その教訓が受け継がれていたのではないか。

<まとめ>

・前近代の野洲川下流域においては、水害の発生を前提とした社会が構築されていた。

・洪水発生時にはマニュアル的対応が人々の習性となっていた。

・一方で、河川改修の結果、水害に対応した生活の知識・知恵が失われつつある。

・地域の人々がどのように川、水と向き合ってきたのかを解明することで、地域の歴史や文化を捉えなおすことができる。

湖南流域環境保全協議会.indd 20 2022/04/22 12:08